

【臨床・研究】

島根大学医学部泌尿器科における腹腔鏡下 ハンドアシストドナー腎採取術の経験

みつ	い	よう	ぞう ¹⁾	あり	ち	なお	こ ¹⁾	お	がわ	こう	へい ¹⁾
三	井	要	造 ¹⁾	有	地	直	子 ¹⁾	小	川	貢	平 ¹⁾
なが	み	た	いち ¹⁾	あん	じき	はる	き ¹⁾	こ	いけ	ち	あき ¹⁾
永	見	太	一 ¹⁾	安	食	春	輝 ¹⁾	小	池	千	明 ¹⁾
なか	むら	しげ	のぶ ¹⁾	ひら	おか	たけ	お ¹⁾	す	むら	まさ	ひろ ¹⁾
中	村	成	伸 ¹⁾	平	岡	毅	郎 ¹⁾	洲	村	正	裕 ¹⁾
やす	もと	ひろ	あき ¹⁾	しい	な	ひろ	あき ¹⁾	い	がわ	みき	お ²⁾
安	本	博	晃 ¹⁾	椎	名	浩	昭 ¹⁾	井	川	幹	夫 ²⁾

キーワード：生体腎移植，ドナー，腎採取術，腹腔鏡，ハンドアシスト

要 旨

当科における腹腔鏡下ハンドアシストドナー腎採取術9例について検討した。ドナーの平均年齢は56±9.4歳，男性7例，女性2例で，腎採取側は左側8例，右側1例であった。腎遊離までの平均時間は154±46分，平均出血量は328±176 ml で，輸血を要した症例はなかった。術中に軽度の脾損傷を1例認めたが，open conversion を必要とした症例はなかった。平均 warm ischemia time は258±57秒であった。術後合併症として軽度の薬剤性肝障害を1例認めたが，保存的に回復した。ドナーの術後1カ月のeGFRは47.1±9.1 ml/m/1.73m²であったが，経時的に改善した。レシピエントの血清クレアチニンは，術後1カ月で0.90±0.28 mg/dl と良好であった。

腹腔鏡下ハンドアシストドナー腎採取術は，ドナーの安全性と移植腎機能確保の観点から，有用な手技であると考えられた。

緒 言

近年，泌尿器科領域での腹腔鏡下手術の発展と普及はめざましく，生体腎移植のドナー腎採取術も多くの施設が低侵襲な腹腔鏡下手術を選択している¹⁾。一方，ドナー腎採取術はドナーの安全性

と移植腎機能の確保が求められ，難易度が比較的高い手術と考えられる。従って腹腔鏡下ドナー腎採取術には，腹腔鏡手術手技の習熟と，局所解剖の理解に基づく確実かつ安全な手術計画が必要である。

当科では，2010年3月より腹腔鏡下ハンドアシストドナー腎採取術を開始しており，2013年5月までに9例を経験している。今回われわれは，腹腔鏡下ハンドアシストドナー腎採取術の手術成績

Yozo MITSUI et al.

1) 島根大学医学部泌尿器科 2) 同 附属病院
連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1